労働者協同組合の中から労働者の自立が

―パラマウント製靴の再建闘争―

石井　光幸（パラマウント製靴共働社・代表）

私たちパラマウント製靴は倒産宣告から10年、再建から７年がたって、いま労働者協同組合へと行きつきました。

倒産宣告を受けた時にはっと気がついたことは、今まで一所懸命にかちとってきた労働条件が全く無一文になってしまうという状況になって、これはいったい今まで自分が何をやってきたのか、組合としては何をしてきたのかということを痛感しました。争議の２年目に、これまでどおりの職場復帰では駄目だろうということで、労働組合による自主再建という方向をたてまして、1986年に都労働委員会が私たちの主張を認めて調停がだされ再建にむかうことになりました。

しかし長い間雇われていた労働者ですから自らが事業をおこすということについては、当初は非常に反対意見がありました。「なぜ倒産した組合が会社をやるんだ、やったってうまくいかないんじゃないか」「作たって売る場所がないじゃないか」と。それは当然なんです。作った靴は全部親会社のスタンダードという会社に納めてスタンダード・ブランドで売られており、私たち自身が販売網を持っているわけではないのですから。そういう中で格闘しながら約２千組合の職域販売を確立し、生協の皆さんとも関係をつくるということを通して、これなら再建できる条件があるだろうということで再建しました。

どういう再建をめざすのか

争議が解決する直前に、どういう再建の仕方をするのかということが非常に大きな課題となりました。我々はこの闘争中に協同組合でいこう、という腹を決めてきましたが、協同組合でやったんでは倒産してしまう、やっていかれないじゃないか、やっぱり通常の企業にすべきだという意見も出されました。

それと労働組合の役員は労働者の気質なり性格を一番知っているので、誰が真面目で誰が不真面目かということもよくわかっています。意外に組合の幹部というのは労働者が不真面目だと思っています。会社の幹部よりも。ですからそういう不真面目な者と一緒にやって経営がなりたつわけがない、「労働者は働かないよ、ストライキはやるけど仕事はしないよ」という考え方の人も多く、「協同組合でやったらみんな働かない企業になってしまう」という意見も出されました。

しかし私たちが協同組合やろうとしたのは、もし本当に労働者が不真面目であったら真面目な労働者をつくろうじゃないか、そういうふうに切り替えるべきだとさんざん議論をしました。残念ながら結果としては争議中に中心になっていた役員は退職し協同組合には参加しませんでした。「石井さん本当に不真面目な人だけが残ったのよ。よくて３年、悪ければ１年ともたないよ」とこう言ってやめていきました。たしかに闘争中には後ろに回っていた人たちが中心に残ったわけですから、こう言われても仕方のない状況だったのです。

しかし７年経ってみてどうだったのか。弱いといわれ、だめだといわれた労働者が、いま中心になって当時以上の仕事をこなすようになってきたのです。なぜそうなったのか、私はここが非常に重要なことだろうと、協同組合の意味はここだと言ってもよいくらいに思うのです。

先ほど労働組合の幹部は労働者の気質を知っていると言いましたが、労働者も労働組合というものをよく知っています。労働組合はスローガンは立てるけれども、実際にはやらないということをよく知っている。ですからスローガンを本当にやるという姿というものをどう作りだすかということを真剣に取り組んだとき、必ず弱いといわれている労働者は寄ってくると思います。パラマウン

トの場合はそれができたのです。できたからこそ7年間ももち、高齢者や弱いといわれる労働者が中心になって職場会議を進めてこれたのです。

労働者が自立する意識改革

争議前には、雇われているわけですから昼休みになったって電気消す人もいませんでしたが、今は誰が何も言わなくても自然に時間になれば電気を消します。在庫が一杯たまれば在庫の心配をし、仕入れが多いとなれば仕入れの心配をし、全く考えられなかったことがおきてきました。

これがやはり本来の労働者の自立であり、労働者が本格的に協同組合をやろうという意識の改革になっているのではないでしょうか。一人一人が協同組合とはこういうものだとわかれば、必ずそこに入ってくると思います。

パラマウントの中では失業なんかしないと皆が思っています。15年前には首を切られた経験のある人たちですが、70才のおばさんも失業するなんて考えてもいません。何故かというと、自分たちが作った企業だし、自分たちがやっているのだから首を切る人はいないじゃないかということです。自分が体力的に続かなくなった時に会社をやめるんだと変わってきたのです。

このように職場が変ってきたということは、お互いに助け合い、信頼し合って、一つの目的に向かってやっていこうという気持ちが生まれてきた証拠であり、この協同組合方式をとってきたことは本当に良かったなあと思っています。

広がる協同組合への期待

これまでもパラマウントに入っている業者の方も一所懸命やっているなという気持ちは皆持ってくれましたが、やはり労働組合がやっているということで後々の心配をするわけです。そういう心配を持っていた業者の方々も、昨年10月、センター事業団との事業提携を結んでから考え方が変ってきました。

業者の方を全部集めて毎年新年会をやるのですが、今年は事業団の永戸さんと中田さんに来てもらい、協同組合についての話しをしてもらいました。そのあくる日から業者の方から自信を持った、期待を持った、これなら大丈夫だ、これなら永遠にパラマウントと付き合っていっても大丈夫だと言う人が出てきたのです。定期的に集まって何かやりましょう、労働者協同組合連合会の人と一回合わせてくださいと、この協同組合に対する期待感というものが生まれてきました。業者の方々は協同組合というものをほとんど知らず、どちらかというと保守的な人たちですが、協同組合の話しを聞いて非常に関心を持ち近づいてきています。いま不況にもかかわらず、パラマウントは非常に忙しくなってきていますが、これも業者の人たちが仕事を持ってくるためで、あそこなら安心できるという評価の現れだと思います。

期待に応えた協同組合を

これからの私たちの展望としては、この協同組合という運動をきちんとパラマウントの中で確立し、地域の中でも本来の役割を果たそうと考えています。東京都内に200坪というかなり広い敷地を持っているので、単に靴を作るだけでなくこれからの高齢社会にむけてどのような仕事ができるか、新しい事業をおこしていけるかということを真剣に考えていく時期にきています。

そうなった時にはパラマウントだけでやっていくのではなく、もっと大きな角度で事業運動というものを打ち出し、協同組合や事業団・労働者協同組合グループが拡大していくことと合わせて大きな展開ができることでしょう。

また雇用をどう守っていくかという本来の労働組合のあり方にも成果を返していきたいのです。現在の資本主義社会の中において、雇用を守るという点では労働組合と労働者協同組合は基本的に一致できる条件を持っていますし、その条件をどう創りあげるかが課題だと思います。私たちの小さな運動の一つ一つを作りあげ、大きく拡大させていった時にはじめて社会変革に結びつき、新しい社会の要素になるのだと思います。